

元治元年に、奥様の身上の煩いをたすけられて入信された飯降伊蔵様が、お礼にお社の献納を申し出られたところ、教祖から、「社はいらぬ。小さいものでも建てかけ」

とのお言葉があり、そこからつとめ場所の建築が始まりました。

その頃の中山家では、11年前に母屋は売り払われてなくなって、僅かに残った8畳と6畳の古い隠居所が教祖のお住まいになっていました。そして、その8畳の部屋に「お目標」の御幣が祀られて、信者の集まる場所にもなっていました。その様子を見て、飯降様は、御幣をお納めするお社を作ることを思いつかれたのでしょうか、教祖ご自身が神の社なのですから、「社はいらぬ」とおおせられたのです。

これが天理教で最初の普請が始まる契機になったのですが、このやりとりの中に、今の私たちが学ぶべき点がいくつかあるように思います。

まず申せるのは、お道の最初の普請は、“たすけられた一人の方のご恩奉じの心が契機になって始まった”ということです。

その頃、お屋敷には、毎月の26日には30人くらいの参拝者があったと伝えられます。隠居所の8畳と6畳の間では当然狭すぎたわけですが。初代真柱が著された「翁の話」にも、「其時分二、二十六日二八、人ノ三十人モ来マスカラ、『一寸シタ者デモ立テハドウデシヨ。』ト翁云ワレバ、秀司君ニモ、『私モソウ思テイル。』ト仰セラル。山中翁モ来合ワセタリ。」とありますように、中山家の当主である秀司先生も、普請をしたいという思いをもっておられました。

しかし、当時の中山家は、経済的にはどん底で、とても自前での普請を始めることなどできなかったと思われれます。そして、当時の信者の意識では、狭いのは中山家の座敷であって、自分たちの集まる場所が狭いという意識はなかったと推察されるのです。しかし、そのような時に、飯降先生が普請のきっかけになる申し出をなされた。「をや」の方から普請を打ち出されたのではなく、たすけられた一人の信者の報恩の思い、子供の方からの申し出によって、本教の最初の普請が始まったのです。

当時は、親神様から不思議なご守護を見せて頂いても、「ありがたいなあ〜、よかったなあ〜」くらいで終わってしまう人が殆どでした。『稿本教祖伝』には、安政4年(立教20年)に、信者が初めて米4合を持ってお礼参りに来たことが記されていますが、それは、つまり、教祖が徹底的な施しをされ、また、不思議なたすけを見せられても、20年間は誰もそのご恩に報じようとする人は現れなかったということです。そして、お礼をする人が現れるようになって、それはあくまで“自分のできる範囲です”というもので、田畑でとれた作物を少しお供えするくらいが精一杯。米4合も持つてくれば、たいしたものだったのです。

ですから、お社の献納などというのは、当時のお道では稀有な申し出であります。普通では、その状況下で、「社はいらんから他のものを…」などとは、なかなか言えないことです。「せっかくのお礼の申し出なのに、それに注文をつけたりすれば、相手の気分を害してしまう」などと、心配するのが当たり前だと思うのです。

しかし、「をや」の目から見ても、飯降先生の真実は生半可なものではない。先生なら、「わしはお社の献納を申し出たのに、『家を建てよ』とはとんでもない」などとは決して言われないことが、教祖には分かっておられたのです。ですから、「お社を…」とい

う申し出が、つとめ場所建築の機縁になり得たのです。

もちろん、この一連の出来事は、「教祖こそが親神様の社である」という理を厳然と示すためのものであり、“親神様へのご恩報じは、理を正してさせて頂くことが大事である”ということをお教えられているのです。しかし、一方では、飯降先生ご夫妻に、「小さいものでも建てかけ…」と、教祖の真の思召しを聞かせて頂けるだけの真実があったことも、よく考え学ばせて頂くべきだと思うのです。

たとえば、「をや」の方に、“このようにしてもらいたい”という願いがあっても、子供の状況を考えて「これをこうしてほしい」とは、なかなか言えないものです。親孝行を強要するような親は親として失格だともいえるでしょう。であるからこそ、「をや」に気兼ねなく何でも言ってもらえるように、安心してものを言ってもらえるように、子供の方から親の全幅的の信頼を得る努力をすることが大事なのです。

“京都のぶぶ漬け”という話があります。“長居をしている主人のお客に、奥さんが「ぶぶ漬けでもいかがですか」と勧めめる。それを聞いて、「これは長居をしました」と詫言を言ってすぐに帰るのが都人。「うまい京都のお茶づけをぜひ…」などと居座って、おかわりまでねだるのが田舎者”という話ですが、本来は相手に恥をかかさないための思いやり、都人のもてなしの心からの言い方なのです。

原典「おさしづ」の個人的な身上や事情の“伺い”の中にも“ぶぶ漬けの話と同じだ”と思える神人間答に出会うことがあります。“こういう悪心、悪行ゆえにそういう身上や事情で悩むのだ”などと、直截的には親神様はおっしゃらない。本人が自分で気づくように、自分で悟るように、一見関係のないようなことをやんわりとおっしゃる。しかし、恥をかかさないように「ぶぶ漬け…」の話をされても、多くの人が親の本当の思いを察しない。“私は神様からぶぶ漬けを勧めてもらっている”などと思いをするので、なかなか身上・事情解決のご守護を見せて頂けないケースが、少なからずあるように思うのです。

「をや」のために何かをするのは、世間の基準からすれば立派な行為です。子供がしてくれることですから、親はどんなことでも受け取ってくださいませし、周りの人にも褒められて、本人も大満足ということになります。しかし、それが親の真からの願いなのか、本当の喜びなのかを問うことも、忘れてはならないということです。

“世間で親孝行で評判の息子がいた。誰かがその親孝行ぶりをこっそり見に行ったら、外から帰ってきた息子が老母に足を洗わせていた。「とんでもない息子だ」と悪評判になったが、彼はなんの言い訳もしなかった。老母にとっては、息子の足を洗うのがもっとも幸せで生きがいを感じる時であり、世間体を気にしてそれを止めるのは老母を悲しませることになったからである。”という、本当の親孝行がいかなるものかを考えさせられる昔話もあります。

「をや」の望みを、子供の方から先に察して、させてもらうように努める。その努力を続ければ、もし子供のすることが「をや」の望みと違う時には、遠慮なくそれを指摘してもらえるようになる。飯降先生のように、「をや」に信頼して頂ける信仰者になる努力をしたいものだと思うのであります。